

職域における気流閉塞（COPD 疑い）の累積罹患率：17年間の経年的呼吸機能検査の検討

○尾上あゆみ<sup>1</sup>、大森久光<sup>1</sup>、小田政子<sup>2</sup>、野波善朗<sup>3</sup>、窪田健一<sup>3</sup>、林俊成<sup>4</sup>、津田徹<sup>5</sup>、  
加藤貴彦<sup>2</sup>

熊本大学生体情報解析学<sup>1</sup>、熊本大学公衆衛生学<sup>2</sup>、日赤熊本健康管理センター<sup>3</sup>、  
所沢呼吸器内科クリニック<sup>4</sup>、霧ヶ丘つだ病院<sup>5</sup>

【目的】慢性閉塞性肺疾患（COPD）は、健康日本 21（第 2 次）における重要疾患に位置づけられている。職域において潜在的に未診断の者が存在する可能性の高い疾患である。診断には呼吸機能検査（スパイロメトリー）が必須であるが、法定項目に含まれておらず、COPD に対する認知度が依然として低いと考えられる。人間ドックは呼吸機能検査を受診できる唯一の場であり、COPD の早期発見・早期介入の場として重要な役割を持っている。

本邦では職域における長期の呼吸機能検査に基づく気流閉塞の累積罹患率に関する報告は少ない。我々は 17 年間の経年的呼吸機能検査より気流閉塞の累積罹患率を検討した。

【方法】日赤熊本健康管理センターの人間ドックを 1994 年（観察開始時）、1999 年、2006 年、2011 年と 17 年間継続受診し、呼吸機能検査を受けた職域の受診者を対象とした。1994 年に気流閉塞が無く、気管支喘息等の呼吸器疾患を除外した男性 379 名（94 年時 30~69 歳、平均 46.4±7.2 歳）、女性 124 名（94 年時 30~62 歳、平均 45.8±6.4 歳）を対象とした。1 秒率（FEV<sub>1</sub>/FVC）70%未満を気流閉塞とした。可逆性試験は実施していない。17 年間の気流閉塞の累積罹患率より、喫煙習慣別の 10 年間の罹患率を算出した。

【結果】男性では、2011 年に 379 名中 55 名に気流閉塞を認め、17 年間の累積罹患率は 14.5%であった。喫煙継続者 64 名中 17 名（26.6%）、期間中禁煙者 198 名中 27 名（13.6%）、非喫煙者 117 名中 11 名（9.4%）に気流閉塞を認めた。年間平均罹患率より算出した 10 年間の罹患率は、喫煙継続者 15.6%、期間中禁煙者 8.0%、非喫煙者 5.5%であった。

女性では、2011 年に 124 名中 7 名に気流閉塞を認め、17 年間の罹患率は 5.6%であった。喫煙継続者 2 名中 0 名（0%）、期間中禁煙者 6 名中 1 名（16.7%）、非喫煙者 116 名中 6 名（5.1%）に気流閉塞を認めた。非喫煙女性の 10 年間の罹患率は 3.0%であった。

【考察】本研究は観察開始年齢が職域を対象としたものである。男性において、喫煙継続者は気流閉塞罹患率が高く、禁煙による罹患率減少を認めた。女性においては、喫煙継続者数が少なく、十分な分析ができなかったが、非喫煙女性の 10 年間の罹患率は 3.0%であった。非喫煙者における気流閉塞の要因に関しては、今後受動喫煙の影響等のリスクに関する検討が必要である。職域での呼吸機能検査と禁煙支援が重要であることが示唆された。

文字数：1,064 字